

茶の湯文化学会会報 No.15

第15号 / 1997年11月10日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL.075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX.075-702-9314

茶の湯と美術工芸

島崎 水

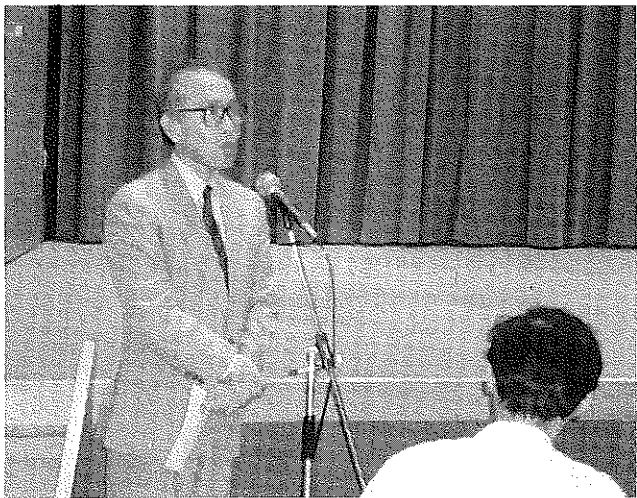
いうまでもなく、茶の湯の席には多くの美術工芸品が用いられる。席主は客をいかにもてなすかについて、道具、つまり美術工芸品の取合せに最大の関心を払うことはいうまでもない。従って、茶の湯の盛んな地域には、いわゆる茶の湯の道具としての美術工芸品の名品が、自然と数多く集り、また茶の湯の道具を制作するために、美術工芸の作家活動も盛んとなっている。こうした状況は、茶道が大成された十六世紀以降現代にいたるまで、大筋において変ることなく、その伝統はひきつがれて息づいているといつてよい。

茶の湯の振舞は、茶室という空間に、席主が考えた美の世界を、茶の湯の道具を用いて演出するいわばドラマであるといつてよい。従って茶会には、それなりのテーマがあつて催される場合が多く、道具組すなわち取合せは、そうしたテーマをより立てるに相応しいものであることが望ましく、各々の道具は、互いに競い合いながらも、そうかといつて突出することなく、全体の調和が見事にとれている必要がある。各々の道具は、それぞれの役割を果たしながら、それぞれの存在意義を主張し、全体として統一のとれた美の世界であるといふことである。従って茶室の空間で、各々の道

具は競い合うことによつて洗練さを増し、そこに独自の美意識である茶の湯の美の世界が形成されてきた。

現代の美術工芸作家たちの活動を見てみると、茶の湯に対して深い造詣のある作家と無い作家との間には、そこに製作されてくる作品に、大きな開きがあることは、誰しもが気付くことである。茶の湯の美意識を持った作品は、どこか日本人の感性を豊かに持った、潤いのあるものが多いといふことができるように思われる。それ程までに、茶の湯の美意識は、日本の美術工芸品に大きな影響を与えている。

また、茶の湯の世界では、いわゆる見立の手法によつて、新しい世界の創造が行われてきた。本来は、日用雑器として生産された工芸品が、茶の湯の道具として見立てられ、茶人の独自の審美眼によつて、日本独自の美の世界が形成されてきた。備前の徳利を花生として、朝鮮半島の雑器を高麗茶碗として茶の湯の道具にひきたてるなど、その応用の美意識は見事である。年代を積み重ね、ある意味での伝統ができあがると、どうしても伝統文化は型にとられやすくなってくる。茶の湯の見立ての世界は、茶の湯の本筋である美意識



第七回研究会報告

平成九年九月六日午後一時より、金沢市の石川県立美術館において、第七回研究会が開催された。当学会の行事が北陸の地で行われるのは初めてのことであったが、三十三名の参加者を得て充実した研究会となった。会場を提供下さいました石川県立美術館には厚く御礼申し上げます。

倉澤副会長の挨拶のあと、開催会場である石川県立美術館を代表して館長の島崎丞氏より歓迎のご挨拶があった。引き続き研究報告に移り、池田俊彦氏（福井工業大学）の「金沢の茶室」、北春千代氏（石川県立美術館学芸第一課長）の「重文『百工比照』に見る小松葭島書院の遠州好み」の二本の報告があった。

なお、開催会場の石川県立美術館をはじめ、茶の湯にゆかりの深い中村記念美術館、大樋美術館には無理をお願いして研究会の前後三日間、本会会員のみ優待割引をしていただきました。快くお引き受けいただいた三館には心より御礼申し上げます。

各研究報告の要旨は次のとおり。

金沢の茶室

池田 俊彦

金沢の茶室史を考えると、やはり前田家歴代藩主の茶の影響は大きかろう。三代利常のそれなどよく知られるところである。そして身分を問わず、茶室がひろく普及していた状況も先学の成果に明るい。ただ必ずしも近世を問断なく通覧できる訳でなく、むしろ不明な期間は長い。発表では、補足資料が十分なまま通覧に努めたが、ここではその概況と、城内のいくつかの事例について述べる。

近世金沢の茶室事例が比較的多く明らかにされているのは、寛文から宝永頃（十七世紀後半から十八世紀初め）の時期と、文政から幕末に至る約半世紀の時期である。

前者の方は、利常の没後、小松を離れた仙叟がちょうど金沢で活動していた時期にあたる。仙叟屋敷に一畳半があったほか（臘月庵日記）、高弟臘月庵や家老本多房州など二十五茶人が三十五席をもち、その多くは小間の茶室であった（茶方所々團之図）、この時期城内でも、五代綱紀が蓮池亭を造ったり、玉泉院丸の築庭を仙叟に命じ、亭樹や花苑を営んだりしていた（加賀藩史料）。

後者の方は、文政から天保期の茶人菱屋

を守りながら型を破って美の創造を行ってきた。茶を知らない作家のものは使いにくいかも知れないが、使う工夫、見立ての工夫を行って、茶の美を作り出すことも必要である。先頃ある茶会で、色絵の深鉢に灰を盛り、五徳を据えて釜を載せ、深鉢を風炉に見立てた振舞いは、客人たちを唸らせていたが、自分の身近にある物を使った茶の湯の美の創造こそ、現代生活のなかに生きている茶の湯の本質ではなからうか。

坡が、文政九年（一八二六）に『数寄屋集』として十六席の図を記している。またこれとは別に、弘化頃から幕末にかけての茶室遺構も少なからず現存しており、どちらとも板畳を多用した変則的な間取りが多く、この時期に変化が進み定着したと推測される。

このほか藩主が営んだ茶室として、蓮池亭の池に十一代治脩が安永三年（一七七四）に造った滝見御亭（夕顔亭）、十三代齊泰が文久三年（一八六三）に建てた巽御殿内の清香軒等が周知される。金沢ではないが、小松の隠居城に利常が承応元年（一六五二）仙叟の前田家有付の翌年に建てた二畳もあるう。

以上を補う事例として、まず「本丸囲金森法印老御作之図」（金沢市立図書館蔵）の四畳茶室がある。深三畳の床の側面に点前座が付く構成で、床框に接して炉を切る異色の茶室である。また、中潜りを入れて屋内を進み躡口に至るのは庭玉軒に似る。間取り、アプローチともに宗和的と言えるが、金森七之助（宗和の子）が寛永二年（一六二五）から前田家に仕えたこととの関係は明らかでない。

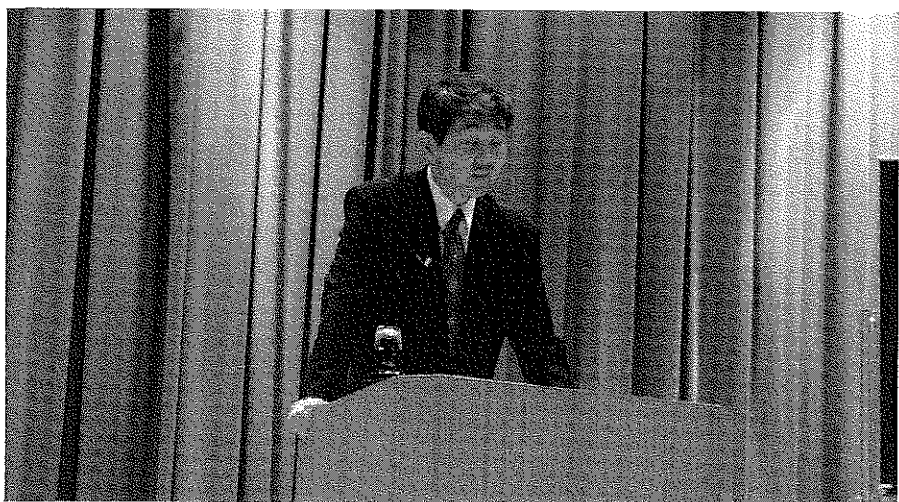
次は延宝九年（一六八一）の「金谷御屋敷御亭平起絵図」（同館蔵）の茶室である。当時整備された金谷屋敷にあったことになるが

詳らかでない。上段をもつ広間、四畳台目、水屋等からなり、茶室は、織部や遠州が好んだし字形平面である。ただし床前畳に火灯口はないし、躡口のあるくわの間から席入する。

十八世紀では前述の事例くらいしか知らないが、十九世紀では、寛政十二年（一八〇〇）の図とされる金谷御殿四畳半の図がある（同館蔵）。壁床で、貴人口と火灯口、襖引違いの三つの口があり、壁には色付が施されていた。文化元年（一八〇四）の「金谷御殿小間御普請之節入用之絵図」（同館蔵）として江戸本邸の数寄屋図（四畳半、三畳、広間等からなる）があるから、四畳半に続いて小間も建て増したかも知れない。そして本邸の図の方では、どちらの茶室にも壁を建てて深い土縁を付けているのが注目される。

天保期の「松之御殿図」にも四畳半はあり、躡口のある二畳が隣に並んでいる。二室には本邸と同様の土縁が付き、周囲をさらに建仁寺垣で囲って、流れのある広い庭と画していた。佐々木泉玄筆の、二の丸好屋口から眺望図の建物にも同様の構成が見られ、そこでは建仁寺垣の中まで流れが入り、建物内に屋根裏ごと造り込んだ腰掛けも建っていた。

巽御殿の茶室は、大小二室が並び、庇造り



込みの深い土縁に流れが入り込む構成をもつ。その巧みさでは当地の筆頭であろう。建仁寺垣こそないが、以上幾例かの試みを集大成した遺構であると理解することができる。

「重文」百工比照にみる

小松葭嶋書院の遠州好み

北

春千代

一、百工比照

百工比照は現在、東京都目黒区駒場に所在する前田育徳会の所蔵品です。

加賀藩五代藩主前田綱紀が収集・整理・分類、命名したもので、工芸全般にわたる資料の集大成です。

百工とは諸種の工芸・工匠を意味し、比照は比較対照するということです。

このコレクションを行った前田綱紀は、四代藩主前田光高の長男として、寛永二十年（一六四三）に生まれましたが、三歳のときに父光高が亡くなり襲封しました。そのため祖父利常が後見し、綱紀は享保九年（一七二四）、八十二歳で没しました。従って藩主として七十九年間、その座にあった訳です。

綱紀は多くの学者を招聘し、また貴重な図書や古文書類を収集、学術に対する貢献は大きなものがあります。

さて百工比照は十一箱と付属の二箱に収められ、数え方にもよりますが、およそ二千点を数えることができ、重要文化財に指定され

ています。

二、内容

詳細は略。

材質的には紙や木・漆・革・染織・竹・金属・象牙・琥珀・真珠・珊瑚・瑪瑙・陶磁器類などですが、陶磁器はいたって少ない。

また実物資料や、それが大きすぎて収められない場合、実物を写しており、ほか図案絵図や模造品、文書・冊子などがあります。

加えて第一号と二号箱に収められているものの表題に「造器寶鑑」とあり、二号箱の中には「百工比照」の文字と「貞享二乙丑」の元号と干支が記され、貞享二年（一六八五）にその名が変更になったらしく、当初は工芸品の手鑑的要素を意図していたと思われるます。

そして第二号、三号、五号、六号、七号、八号、十一号箱などに「遠州」の名にちなむものが収められています。

例えば第三号箱の金具類には「小松葭嶋寺作御書院」「小松葭嶋遠州御座敷」「江戸遠州御座敷」「江戸御成書院」などと書かれた紙が貼られ、小松や江戸などの実際の建築金具であったこと、遠州好みの書院の御座敷に使

われていたことなどを知らることができます。

三、前田利常と小松葭嶋書院 加賀藩三代藩主前田利常は、前田家歴代でも傑出した文化大名として知られています。

慶長六年（一六〇一）、徳川二代将軍秀忠の娘珠姫（天徳院）と結婚、このとき珠姫は三歳、利常九歳でした。寛永十六年（一六三九）に隠居し、翌年、江戸から小松に移り、小松城を修築、綱紀を後見し執政を行いました。万治元年（一六五八）、六十六歳で没しています。

利常と交遊のあった人々は多くを数えますが、殊に小堀遠州とは昵懇の中であり、寛永の初め頃から茶の湯を通じ、種々交わっています。ところが正保四年（一六四七）、小堀遠州が没しますが、翌年の慶安元年（一六四八）、小松城内の葭嶋の露地を整え、八月中旬には金森宗和を招き茶会を催しています。葭嶋に既に遠州指図の書院が建てられていたものと解せられ、そこには百工比照の「小松葭嶋遠州御座敷」に相当する金具類が使用され飾られていたものと考えられます。

続いて慶安四年（一六五二）、千宗室仙叟が遠州の弟小堀左馬介正春の仲介により加賀藩に仕官し、七月には利常に従い小松に下り

次に百工比照にみられる遠州好みの金具類に関して、スライドで実際にご説明したいと思います。（以下スライド略）

例会報告

近畿例会

平成九年度の第一回京都例会は、八月二十二日（金）、午後六時三十分より、京都市左京区の京大会館を会場として行われた。概要は左の通り。

今回は「茶の湯と宗教」がテーマ。倉澤行洋副会長の司会のもと、三崎義泉氏が天台本覚論の面から、今泉元司氏が禅の面から、影山純夫氏が神道の面から、それぞれ基調報告がなされた。

まず、影山氏は「紹鴎侘びの文」や「分類草人木」などの史料を中心に、茶の湯が神道の道徳観とも結びつく「清浄」を尊んでいること。また、茶席に神の依り代としての花を飾り、その前で共同飲食を行うなど、神道とも共通する側面があることを話された。

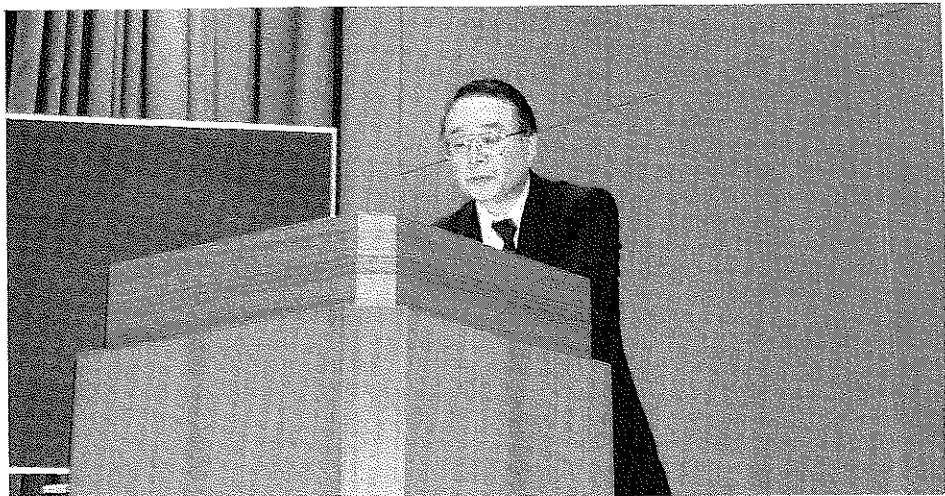
次に今泉氏は村田珠光、武野紹鴎、千利休らの事例を取り上げるなかで、わび茶が成立する根本は禅である。また、無に徹して有に還るといふ二元対立を、「世間即出世間」に統一するなかで、茶の湯が総合文化体系と

三の丸に屋敷を拝領しました。「宗旦文書」によれば「二畳敷たてさせ」と二畳敷の茶室の造立が仙叟に命じられ、その竣工は承応元年（一六五二）のことであったとみられます。

これに関し「三壺記」には、「承応元年江戸より御帰国之節、御大工伊右衛門を山崎へ被遣、遠州の指図之数寄屋を指図被仰付、御大工八右衛門を南都へ被遣、利休指図の数寄屋を写させ、直に上方より小松へ帰着す。（略）山崎松屋源三郎すきやを遠州座敷と申しけり」と記されています。三壺記は編纂文書であり、その引用については慎重を期せねばならず、この件に関しても明かに山崎と奈良とを取り違えています。

他の資料から、奈良では松屋久好の逆勝手の四畳半、山崎では妙喜庵の利休茶室として知られる待庵を調べさせていることがわかります。しかし実際にそれが造られたかは疑問です。

ここで金沢市立玉川図書館蔵の「清水家文書」の「数寄屋絵図」B本に、又隠に似る四畳半、遠州好みの四畳半大目、利休聚楽屋敷の二敷に酷似した利休二畳敷などの平面図が収録されており、この三つの茶室こそが葭嶋に造られたものと推察されます。



なつたことを報告された。

最後に三崎氏が、「天台本覚論」にいう、自分の内に仏がある、という考え方が基本となつて、これが茶の湯のみならず、能や歌の世界にも反映していることを述べられた。

その後、活発な質疑応答が行われたが、時間的な制約もあつて十分に論議を尽くすことができなかった。

司会の倉澤氏から、今後も「茶の湯と宗教」をテーマとしたシンポジウムを継続して行きたいとの挨拶があつて、例会は終了した。

東京例会

平成九年度の第一回、第二回、第三回の東京例会が東京学芸大学を会場として次の通りおこなわれた。内容の概要は左の通り。

第一回 平成九年八月三十日(土) 午後二時
「松花堂の消息を読む」 矢崎 格氏

平成九年度第一回の東京例会は、八月三十日(土)、長年松花堂昭乗の研究に携つてこられた、矢崎格氏が「昭乗の消息文を読む」の演題で話された。同氏が所蔵される軸装の消息を持参された。またかつて「新収松花堂書状について―松花堂昭乗とその交友―」と題

最後に茶の湯とイギリスの茶の文化の比較のためにいくつかの問題提起をした。会場からは熱心な質問や意見発表があり充実した討論となつた。例えば一九世紀以降の茶論について、緑茶とポピー茶、紅茶など茶の種類について、階級の問題、茶室とティー・テーブル庭について、茶の道具について、喫茶文化の担い手としての女性たちなど興味深い問題が論じ合われた。



大会・研究会の発表者を募集しています。大会は一報告につき、報告二十分、質疑十分程度。研究会は報告六十分、質疑三十分程度です。

発表を希望される方がありましたら、事務局までご連絡下さい。ご連絡には、住所、お名前、連絡先、所属などと共に、八百字程度の梗概を大会、研究会応募の別を明記して、事務局までお送り下さい。

なお第八回の研究会は平成十年二月二十一日(土)に東京の五島美術館で行われる予定です。

して「悠久」十六号(昭和五十九年一月鶴岡八幡宮刊)に紹介された時の、解説文(写真掲示)を配布された。この消息は、松花堂が小堀遠州に宛てたもので、文中に佐川田喜六、淀屋ケ庵などとの交友が明示される。講演の内容もここに集約された。氏は、今日庵文庫の研究紀要第四集に「松花堂昭乗の芸術と生涯」を執筆されており、これの刊行を視野に入れてお願いしたのであるが、未刊とのこと、日程の不調をお詫びしなければならぬ。

(戸田勝久記)

第二回 平成九年九月二十日(土) 午後二時
「宗久・宗易道具書立について」 高橋あけみ氏

第三回 平成九年十月二十五日
「イギリスの喫茶文化」 滝口 明子氏

日本の茶の湯文化について考えるとき、中国や韓国、欧米をはじめ世界各地の茶の文化を知ることによつて茶の湯文化の特質が浮かび上がってくることもある。このような立場から(1)ティーカップの中の出会(西洋における東洋の茶)(2)一七一一八世紀の茶論争(喫茶の流行と定着過程)(3)一八世紀イギリスのお茶会(スライド)(4)アフタヌーン・ティー



平成九年度の茶の湯文化学会大会を左記の要領で開催いたします。会員の皆様の参加をお待ちしております。

記

日 時 平成九年度十一月二十三日(日)
会 場 ホリデイ・イン京都
ホリデイホール

京都市左京区川端通北大路下る
電話〇七五―七二二―三三三三

参加費 千 円(非会員は二千円)
懇親会費 九千円

次第

受 付 十二時三十分より
研究発表(第一部) 午後一時より

一、高橋 清文氏

「四大茶会記にみる茶約

―データベース茶約

―一覧表による―

二、野口 企由氏

「場の概念と茶の環境

―現代デザイン教育への

効果的導入―

と茶の湯(比較考察)という順序で、イギリスの喫茶文化の大きな流れをたどり、茶の湯との比較を試みた。

岡倉天心は「茶の本」(一九〇六)のなかで、「不思議なことに人類はこれまでに茶碗の中で出会っている」と述べ、茶は西洋において受け入れられた唯一のアジアの儀礼であるとしている。しかし果して西洋の人々はこの東洋の飲み物を「躊躇なく」受け入れたのだろうか。

イギリスの喫茶文化は一七世紀に始まり、一八世紀にその原型ができ、一九世紀に独自の伝統として儀式化と大衆化が進んだと考えられる。とくに一八世紀に茶が市民社会の家庭の飲み物、コミュニケーションの飲み物として定着するまでには喫茶の是非をめぐるさまざまな論争があつた。そこで今回は一八世紀の茶論争と茶会に焦点を絞り、有名なジョナス・ハンウェイの反茶論やケンベルの『日本誌』(一七二七)の重要性に触れつつ、この時期の茶会の絵をスライドで見た。スライドでは茶の淹れ方や飲み方の作法形成過程。茶碗や受け皿、ポットなど茶道具にみられる東洋趣味と西洋独自の工夫などに注目しながら解説を行った。

三、桐浴 邦夫氏

「紅葉館と星岡茶寮について

―一八八〇年代の数寄屋―

休憩

研究発表(第二部) 午後三時より

四、高橋 忠彦氏

「宋の詩文に見える茶具

―茶臼と茶瓢を中心にして―

五、小泊 重洋氏

「いま茶の生産現場で起こつて

いること―お茶の味と肥料―

休憩

記念講演 午後四時三十分より

「学校教育と茶道」

甲南女子大学前学長 鯉坂 二夫氏

懇親会 午後六時より

*別途、大会のご案内をさせていただきますので、同封の返信用はがきにご出席をご記入のうえ十一月十一日(火)までにご返事をお願ひ致します。

*参加費・懇親会費等は前回同様、事前振込制になっていますので、ご注意ください。

例会のご案内

東京例会

以下の日程で午後二時より、東京学芸大学（小金井）を会場として行われる予定です。

参加は自由です。ふるってご参加ください。

一、平成九年十一月二十九日（土）

「栄西以前の茶の湯」 中村 修也氏

二、平成十年三月二十八日（土）

「茶の湯における懐石の系譜」

谷村 玲子氏

近畿例会

近畿例会は、京大会館を会場として午後六時三十分より行われます。参加は自由です。

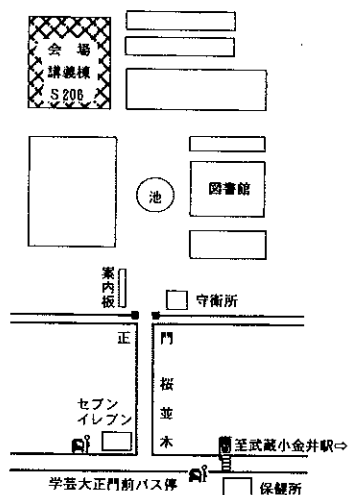
会員の方のご来聴を歓迎します。

一、平成十年三月六日（金）

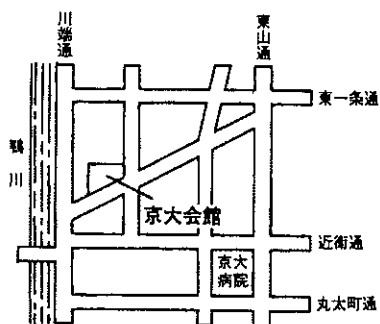
シンポジウム「茶の湯と自然」

中村 昌生氏他

会場略図（東京学芸大）



会場略図（京大会館）



京大会館

〒606 京都市左京区吉田河原町15-9
TEL (075) 751-8311(代)
FAX (075) 761-5403

後記

*遅くなりましたが、会報の十五号をお届けいたします。すでにご案内がお手元に届いていることとは思いますが、平成九年度の大会が十一月二十三日（日）午後一時より「ホリデイ・イン京都」を会場に開催されます。さまざまな分野からの報告が行われます。ふるってご参加ください。

*平成八年十二月の近畿例会の折りに「縮模様のきんちやく袋」、平成九年六月の総会で「赤い柄のハンカチ」の忘れ物がありました。学会の事務局でお預りしています。お心あたりの方がおられましたら、事務局までご連絡ください。

*会報十一号に寺田孝重氏の「奈良県における茶業発達過程の研究」を掲載いたしました。本文中の掲載写真（寛永十年大和国国郷帳）の所蔵先に誤りがありましたので、お詫びして訂正させていただきます。

（誤）「東大寺図書館蔵」
（正）「笹岡家文書」